文芸の広場

◆俳句

令和一閃（いっせん）

令和一閃伊那七谷を清めたり
いくさ場に孫送るまじ花菖蒲
九条を世界遺産にメーデー歌
朝焼けや日本丸よ何処へゆく
結論を急ぐことなし天の川

稲垣隆俊（中43回）

●いながき・たかとし

俳号・鷹人。龍江村（現・飯田市）出身。陸士在校中に終戦、旧制松本高校に編入。大学は東大よりも京大と誓い合って受験したが、親友は不合格。来年こそ必ずと誓う彼を待つために、私は入学を延期して会地中学校（現・阿智村）の臨時教員に。父親代わりの長兄陶石を師に俳句に熱中。京大入学時は桑原武夫教授の「第二芸術論」旋風が吹き荒れていた。

越前雑詠

復元の一乗谷や藤袴
天狼に吼ゆる福井のティラノサウルス
時雨るるはお市の涙北ノ庄
萩一枝左内の墓に妻手向け
勝家の化身となりし越前がに

林　璋（高5回）

●はやし・あきら

高森町市田出身。福井は家内の母の生家があり、幕末の志士橋本左内は血縁です。また朝倉義景の居城一乗谷は、すっかり剥土復元され、当時を偲ぶ民家や人形も置かれ、今年NHKテレビで放映中の「麒麟がくる」の明智光秀もあの山奥に3年住んでいたと説明を受けました。以上の状況で、昨年、家内と共に旅行した際、詠んだ俳句です。

母の袖

入学のしっかり握る母の袖
短夜の結びを試す七十路釣（なそじつり）
紅葉葉の枝を離れる音しきり
寒林に血染めの翼野の掟
初笑暮の碁敵討ち取ったり

北林　巌（高17回）

●きたばやし・いわお

俳号・春彦。高森町下市田出身、立川市在住。今回は伊佐さくら子主宰の「さくら会」と、趣味の集まり「蕎麦屋de819」会での句の中から拾ってみました。17回生のメーリングリストで短歌の投稿が続いた時期がありましたが下火になり、定年を前に何かをと、俳句を始め、細々とやっています。一年一句が目標。

◆川柳

マスクの娘（こ）

ゴホンと聞くビクッと見回す電車席
コロナ禍で繁盛してますママ床屋
コロナ禍の師匠は弟子でも影踏まず
マスクの娘みんな美人に見えるなり
お買いものマスク持ったか妻に問い

原　俊夫（高9回）

●はら・としお

柳号・閑原。阿智村（旧・会地村）出身。現役時代は、技術畑でしたが、齢67から伝統ある太平洋美術会の画家で運営委員なども務めています。82歳の今は、囲碁やゴルフに加え、横好きが広がって随筆書きなどをしています。最新作は体験談の「奇妙な厄日の出来事」「不思議なお話」。そして自作の巣箱を庭樹に掛けて、四十雀の巣立ち観察記「巣箱と鳥と猫」。

はぐれ道

はぐれ道どこかで上がる遠花火
瀬を下る水のさざめき舐める頸（くび）
散弾の穴ニンゲンを見返す眼
逆縁の青柿落ちる不意の風
馬の眼の見開いたまま聖者たる

宮下恭一（高18回）

●みやした・きょういち

柳号・一穂（いっぽ）。飯田市大通り2（羽場3区）出身。還暦を機に、趣味として川柳を学ぶ。師は十六代尾藤川柳。所属は川柳公論社。新型コロナウイルス感染拡大による長く続く巣ごもりの中、思いを川柳に吐き出し、こころとからだのバランスを何とか保っている。こころを吐露する創作川柳をつむぎ、川柳を道連れに人生をいっぽいっぽ歩んでいきたい。

◆みんなの川柳（投稿作品より）

昔ならマスク覆面は悪い奴
長生きの秘訣は病院へ行かぬこと
漫然と生きても退屈のない不思議

●天龍ほたる（高1回）

・・・現代はマスク警察横行す

〈高34回生、新型コロナを詠む〉

ドアノブをつまんで回すコロナかな
●ひろぴー
交わるなコロナは急に止まれない
●のんママ
みぎひだり見渡し小さな咳一つ
●伊那のはな
ディスタンス口実にして義理縮小
●左皿方皿
ちちははの墓参りをしそっと発つ
●やな
風越（かぜこし）に翳（かげ）る故郷（ふるさと）照るコロナ
●黒男
・・・コロナが運んだ詩歌の種、拾ってますね